東条英機元首相について

嘗て日本はＧＨＱによって洗脳され、太平洋戦争は、日本が世界征服の為に政府と軍部が起こした戦争であって、国民は騙されたのだと教えられた。これは国民が政府と軍部に憎しみを抱き、「戦う心」を失った平和ボケの民族を作り上げる戦略であった。又これは東京裁判を批判されず無事に行う為の路線引きの役目も果たした。そして日本人の謙虚さ、潔さを上手に利用し、戦勝国に対する贖罪意識を持たせることに成功した。当時はこの与えられた巧妙な罪人意識と左派のインテリ層が無批判に神の声と信じた「３２年テーゼ」の思想が混り合い、反日思想の知識人が多く生まれ（当時のアメリカの知識人、政府要人にも左翼思想に毒され、ソ連のスパイとなったものが多く居た。後にマッカーシー旋風で粛正される）、各界のリーダーとして送り込まれた。特に大学教授、マスコミ関係が多かった。

注）３２年テーゼ
1932 年 5 月にコミンテルン（1919 年から 1943 年まで存在した国際共産主義運動の指導組織。別名は、第三インターナショナル。）で決定された『日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ』の通称。「赤旗」1932 年 7 月 10 日特別号に発表された。日本からは片山潜、野坂参三、山本懸蔵らが参加して討議された。

各国のマスコミに共通することだが、真実を捏造し、無知な大衆に迎合し喜ばせることを生業（ナリワイ）とする輩が多いが、戦後の日本弱体化政策の普及の為に強力な手段として利用された。今もその影響は尾を引いて民族に悪影響を与え続けている。

この様な戦後の状況の中でＡ級戦犯に仕立てられた軍人の中でも東条元首相は特に極悪人の代表者の如く思われるよう仕向けられた。果してＧＨＱが裁いたような人物だったのだろうか？否である。人道の敵として裁かれたＡ級戦犯など真実としては居ないのである。裁かれるのはアメリカの側であろう。確かに誰でもそうであるように欠点はあったであろう。例えば国際知識に乏しい軍人官僚であるとか。しかし東条は断じて国賊や売国奴ではない。まして人道の敵などではない。天皇に信用されなかった杉山元参謀総長に代表される日本陸軍の中で唯一、信用されたのは東条であった。彼は首相に自ら求めてなったのではない。陸軍の内部でも信用のあった東条は、アメリカとの開戦のエネルギーが溜り

に溜った陸軍若手幹部将校達の熱を押え込むのは、陸軍に弱い近衛では無理、押えられるのは東条しか居ないとの理由で木戸幸一、近衛文麿に顧われて首相にならされたのである。陸軍で一定の信頼と人望がある、暴徒を抑える実力もある、天皇の信頼もある、官僚としての東条は天皇が絶対であった、開戦強硬派ではない・・・・・・の理由で木戸と近衛は東条を選んだ。

東条 英機

天皇も陸軍大臣時代の判断力、決断力、実行力を知っており、この男なら組閣の際に条件をつけておけば陸軍の暴走を抑えて順調に事を運んで行くだろう（昭和天皇独白録より）。天皇も毒をもって毒を制するといふ賭けに出られたのであろう（天皇・近衛・木戸・海軍は三国同盟、開戦反対）。十六年十月十七日天皇は組閣の命令を東条に下す時、「憲法の条項は尊守せよ」と言われ、木戸内大臣は「御前会議は白紙還元で改めて平和の道を懸命に探れといふ思し召しだ」と説明した。東条はこの時の事を、足が震えて何がなんだか分からなくなったと赤松秘書官に述べている。

注）御前会議
大日本帝国憲法下の日本において、天皇臨席の下で重要な国策を決めた会議。1894 年（明治 27 年）に対清開戦（日清戦争）を決定したのが最初。以後、三国干渉や日露戦争などに際して開催され、1938 年（昭和 13 年）以後には日中戦争（支那事変）の処理方針、日独伊三国同盟、対米英蘭開戦（真珠湾攻撃による太平洋戦争開戦）などを決定した。

その日の内に、秘書官に車を運転させ明治神宮、東郷神社、靖国神社に次々回り、深く、長く礼拝をし、神の加護に頼るしかない、苦しい胸の内を木戸に述べている。東条は「天子様」といふ言葉を多用して、陸軍幹部に御前会議で決まった「戦争必至」といふ開戦に向かう路線を、なかったことにすること、そして改めて和平を目指し、日米交渉に全力を尽くすことを伝えた。そして、武藤軍事局長が陸軍の作った組閣名簿を渡そうとしたが、東条は「本日より陸軍の代表者ではない。公正なる、又平等な人選をしなければならない」と言って、受け取らなかった。陸軍の思うようにはならんぞとの決意を示したのである。そして東条は自分も同じだった統師部の考えを１８０度変え、平和に向かって懸命な努力をすることになる。

一方、アメリカは最初から日米和平条約など全くその気などはなく、ただチャンスを狙って時間稼ぎをやっていた。日本のみが、情報をとれず甲案や乙案を真面目に提出するといふ一人芝居を演じていた。東条もこの一人芝居にのって、無意味な努力を繰り返していたが、アメリカの本意を知るにあたって、天皇の御希望が達せられないようになる天皇の御失意を想い、連絡会議の折、途中で泣き出すといふ前代未聞の出来事を起こしてしまう。そしてついに勝つ見込みのない開戦が決まった日、東条は寝室で皇居に向かい正座し、長い間泣いていたのを家族が戦後証言している。己の非力で天皇の和平への御聖慮に応え奉る（こたえたてまつる）ことが出来ず、情けなさと申し訳なさに耐えられなかったのであろう。東条はじめＡ級戦犯とされた人達は、国民の開戦を促す東条非難の三千通の手紙や主戦派の中堅将校達の暴走機関車を止める為に、東条達Ａ級戦犯とされた人達は命をかけて暴走機関車に飛び乗り、必死に止めようと努力したのは事実である。その人達を今、私達はＡ級戦犯とか、人道に対する罪人と言えるであろうか？

東条は山本五十六が、敗戦を承知で楠木正成が足利尊氏と戦った湊川出陣と同じになるだろうと部下に語ったことも知っていた。東条の心中を察するに余りある。東京裁判でも東条は彼の頭の良さ、記憶の良さを生かし堂々と戦った

東京裁判での東条英機

。笹川良一氏（宗道臣と昵懇）に聞いた話では、**俺が生き恥を晒しているのは、天皇を守る為の戦いだ**と言ったそうである。

合掌

平成二十六年三月八日
志雲会塾長　有馬 正能